



第15回 東京外語会有志による海外支部歴訪の旅 ～トルコ周遊9日間～

関西支部幹事長 門馬寛巳 (T昭35)

長い間の願望でもあった海外支部歴訪の旅に今回念願かなって参加することが出来た。今回ツアー団長石原隆良氏(外語会元理事支部委員長)をはじめとする幹事の皆さんのご苦勞のお陰であり心より感謝します。以下、トルコ到着初日のイスタンブールにおける外語会トルコ支部との交歓会をスタートとする外語会有志によるトルコ周遊9日間トルコツアーの様子をお伝えします。

9月20日(金) 成田空港から一路イスタンブールへ

トルコ航空成田発12:30、現地着同日18:00、ノンストップ12時間の旅、時差マイナス6時間。空港ではパリから参加のパリ支部長沼田睦子さん(F昭44)と合流。ガラタ橋下のレストランNew Galataで最初の夕食の後、Fresin Topkapiホテルにチェックイン。

自身2度目のイスタンブールだが観光シーズンもあってか物凄い人出と渋滞。2020年のオリンピック招致を意図しただけあって国力の増大ぶりは容易に理解できた。国土は日本の2.2倍で人口7300万、イスタンブールは1500万人の大都会。

今回ツアー参加は13名と少なかったがバスは大型46人乗りでまずは安堵。到着時気温は20℃と涼ぎやすい。湿度が低いのも酷暑の日本からの

我々には朗報だ。イスタンブールは東ローマ帝国時代の首都、当時はコンスタンチノーブルとよばれたのはご存じの通り。トルコの首都はアンカラだが経済、文化、歴史の中心地はここイスタンブールだ。

9月21日(土) 終日イスタンブール観光

旧市街は観光名所が目白押しだ。13世紀に興ったオスマントルコの首都だけあって行くところ全てが素晴らしい。有名な16本のミナレット(塔)を持つブルーモスクでは靴を脱ぎ、女性はスカーフ着用。近くにある地下宮殿と称する地下貯水池も見学、4-6世紀の建造とかでその知恵の遠大さに驚かされる。ついで近くのアヤソフィア博物館へ。元ギリシャ正教の大聖堂だけあってモザイク壁画が有名。

昼食後は広大な屋根付きのグランドバザールでお買い物。値段交渉のイロハを現地通訳のAさんに教わる。そして大本命の一つトプカピ宮殿へ。マルマラ海に面した広大な土地に立つ宮殿にはオスマントルコ時代のスルタンの膨大な財宝の数々が展示され、中でも84カラットのダイヤには目を見張る。その権力の大きさを偲ばせるに充分な財宝の数々であった。

その後、今回のメインイベント、イスタンブール支部との交歓会会場へ急ぐ。第一ボスポラス大橋を渡ってアジア側へ移動、海峡を見渡す高台の



ブルーモスクのミナレットを背景に



遠か彼方に見えるのが東西をつなぐボスポラス大橋

Bridge Restaurantへ。交通渋滞もあり定刻より40分程遅参、カドゥザーデ温子（旧姓古川Tr 14）イスタンブール支部長他駐在中の6名の方々を大変待たせ汗顔の至りとなったが、皆さんの暖かい大歓迎に感激。

石原団長の挨拶の後、上原理事長と立石学長からの支部宛メッセージを新田前支部委員長が披露。沢山のワインで交歓会が始まり時間の経つのも忘れて賑やかに進行。集合写真を撮り苦労話等もお聞きしたりして見事な街の夜景に見とれながらホテルに戻って2日目終了となる。

9月22日（日）イスタンブールからイズミールへ
朝方驟雨らしきものが降ったがすぐに上がる。この時期トルコの雨は大体直ぐ上がるそう。さて午前中は引き続き市内観光。オリエント急行の終着駅跡を横目にエジプシャンバザールで香辛料や紅茶などの小さな買い物、そして愈々待望のボスポラス海峡クルーズ、Kapatasno船着場から、中型のヨットを貸しきる豪華さだ。海峡を黒海方面に向け廻り第二ボスポラス大橋迄の往復1.5時間、船上からは左右の名所旧跡を贅沢に眺めながらデッキではビールをかたむけつつ随所に翻る巨大なトルコ国旗はまことに心地よい眺めであった。

この第二大橋だが嘗て日本の支援で完成しトルコから大いに感謝されたと聞いたことがある。今イスタンブールでは両国共同で今度は長さ1350Mの海中トンネルの建造中で、2013年12月に完成予定と聞いた。海底に長さ135M、巾15.8M、高さ9Mのコンクリート製の、列車二本が通る箱状のものを敷設する工法と聞く。これは列車のみのトンネルであり車輛用ではないという。車輛用には第三の橋の計画が別途あるとかだが完成予定は未定。

昼食はマルマラ湾沿いのSehir レストランで“固くて噛めないシシカバブ”の後、空港へ。国内線50分程でイズミールへ。昼を抜いていたので機上でのサンドイッチは美味しかった。イズミールはエーゲ海沿いのトルコ3番目の農工業都市。聞けば美人の産地とか、ミスユニバース代表はここ出身が多いというのが事実か？

夜の食事は、海が近いだけあって、ちぬ（黒鯛）が大変美味しい。トルコは回教徒が主であり朝食にはチーズ、チャイ、オリーブ、そしてパンとい



チヌ鯛のご馳走です

う。食料の97%は国産と胸をはるだけあって小麦畑が広がる。砂糖は砂糖大根から甜菜糖を、ミルクは放牧の羊と牛からだ。果物はイチジク、石榴が豊富で輸出もしているとか。バムッカレ地区では綿花を栽培しており細番手の綿織物が得意と思われる。

9月23日（月）イズミールからエフェソスへ、そしてバムッカレへ

聖母マリアが晩年を過ごしたとされる山上の家は多くの観光客で混雑、イスタンブールでも多く見られた地中海クルーズの一行らしい。観光客はあちこちの国から多く、久しぶりにインドネシア語も耳にした。近くのエフェソス遺跡は紀元2-3世紀のものと言われトルコで最大のローマ遺跡とか。宗教、政治、娯楽、教養全ての施設が驚くほどに残っている。

アルテミス神殿跡に立ち寄り、山間のペンションレストランで昼食、皮革製品店を覗いてバムッカレへバスを飛ばす。なだらかな起伏の多い地平線の広がる車窓からの眺めは美しい。この日は合計5時間程がバスの中だ。赤い石灰棚で有名なバムッカレのホテルには18:00過ぎに到着。温泉もあって早速入る人もいた。



エフェソスの広大なローマ遺跡発掘現場

9月24日（火）パムッカレからコンヤへ

まずはヒエラポリスの紀元前2世紀に作られた都市遺跡。温泉が出るためか随所に張り巡らされている温泉水を流す溝が立派に残っている。直ぐ下方には世界遺産に指定されている見事なパムッカレの石灰棚が白色に映えて美しい。この日はこれで終了し一路400km、車でコンヤに向かった。

車中では16世紀オスマン帝国時代の物語をビデオで鑑賞。この辺りは海拔1100M、左右は一面の麦畑や湖沼地帯、随所に緑が広がっている。車中から眺める田舎の風景、小さな集落でも必ずモスクがあった。

コンヤの街に入るとホテル近くに珍しくスーパーがあると聞き皆さん早速買い物に走っていた。このコンヤ地域、冬は寒く夏は暑く小麦の栽培には向いているとのこと。宗教色の強い地域で酒類は全く販売されていないとか、人口100万人以上、市内には市電が走り、女性の多くはスカーフを被り、カメラを向けるのも注意が必要であった。

9月25日（水）コンヤからカッパドキアへ

宗教色の強いコンヤは京都とは姉妹都市であるという。朝9時頃から市内のカラタイ博物館（元神学校）を訪れ、1200年代の史跡記録を見た後、今度はコンヤ平原を走ってカッパドキアに向かう。限りなく広大でフラットな平原のシルクロードをひたすら進む。途中、13世紀に建てられたというキャラバンの隊商宿に立ち寄り食事と休憩、更にシルクロードを走ること240km、喜多郎作曲のシルクロードを聴きながら遠い昔に此処を通った人の気分に暫し浸っていた自分がいた。

途中大きな製糖工場があり砂糖大根を山積みのトラックが列を成していたのは壮観であった。昼食後はトルコ石専門店“Agad”で買い物をして地下8階までであるという地下都市カイマクルを見学。ギリシャ正教の教徒等が迫害から逃れる為避難生活していたと言われる場所は極端に狭くて急峻。カッパドキアの奇岩群がどうして出来たかだが、今から5万年程前に近くのエルジエス山（3900M）やハッサン山（3000M）が噴火し、火山灰や溶岩が堆積し風雨に弱い地層部分が侵食され奇岩群が出来たといわれる。

シルクロードの旅を楽しみながら宿舎の洞窟ホテル「テメンニエビ」に到着。夕食後はベリーダ



カッパドキアの奇岩群の前で

ンスを見学したがダンサーは一人だけでやや拍子抜け。

9月26日（木）終日カッパドキア滞在

気球体験希望者5名は早朝5時にホテル出発、気球から日の出を見て最高の体験と喜びつつ無事戻り安堵。午前中は奇岩群を見たり洞窟民家を訪問して生活体験等を質問したりで有意義であった。また、絨毯工場の見学、ギョレメ野外博物館を歩いたりしてツアー最後の一日を満喫。

最後に新潟大の女子大生栗原さんの不幸な事件があったゼミ溪谷入り口に立ち寄り全員で黙祷を捧げることが出来たのは大変良かった。幹事のご配慮に感謝です。“Ala Turka”レストランでは石原団長ご配慮の白ワインと赤ワインで乾杯し、これまでの旅の無事を祝い全てに感謝しつつお別れPartyとなった。

9月27日（金）最終日、カイセリ空港から

イスタンブール乗り継ぎで帰国の途へ

長い長いと考えていた今回のトルコ旅行だが最後になってみるとアッと言う間に終わった感じがする。旅行中特に皆さん怪我も無く無事に帰国できるのはまずもって参加者みなさんのご努力の賜物であり、とりわけ幹事を見事に務めた鈴木惟高さん（F昭45）の気配り、添乗員佐藤進子さんの心憎いご配慮、そして5回目参加の咲耶会東京の友金守さん（IP昭35）、写真撮影を一手に引き受けていただいた林義之さん（F昭41）には感謝申し上げます。帰りのフライトは追い風が強く、予定より成田には45分早く帰着し空港で無事解散となる。旅行中は終始晴天に恵まれ随所で思わぬ歴史の勉強も出来、今回のトルコは大成功でありました。

東京外語会
理事長 上原尚剛様

東京外語会有志によるトルコ支部訪問団団長
石原隆良 (D昭31)

この度の、「東京外語会有志による海外支部歴訪の旅」第15回目に当るトルコ支部訪問に際しましては、格別の御配慮を賜り誠に有難うございました。御蔭をもちまして、所定の全行程を無事終了し9月28日に無事帰国することが出来ました。好天に恵まれ、楽しく且つ有意義な旅を果たすことが出来、殊に、到着翌日に開催致しましたトルコ支部との交歓会は、実り多い会であったと大変嬉しく存じます。

この交歓会に際し、上原理事長から支部宛の御懇篤なメッセージを賜り、更に母校の action plan 配布、ならびに「ガイドブック」、「学部案内」などの資料御提供にも格別の御手数を添う致しましたことに厚く御礼申し上げます。これにより母校の現状もよりよく理解されるであろうと存じます。

旅の概要につきましては、他の幹事諸君からの御報告に委ね、私からは私の感じましたこと等を御伝え致したいと存じます。

今回の訪問団にはパリ支部長沼田睦子さん (F昭44) と関西支部幹事長門馬寛巳氏 (T昭35) の参加を得ましたことが特筆し得るかと思存じます。沼田支部長は第12回ドイツ、第13回エジプト訪問の際にも現地参加し、フランクフルト、デュッセルドルフ、ベルリン3支部および同じく現地参加されたプラハ支部、翌年にはカイロ支部の5支部長と直接会って海外支部間の交流を果たし、加えてカイロでは交歓会に御出席戴いた富盛元副学長とも親しく語り合う機会を得て大いに得るところがありました模様で、その収穫が翌年第14回パリ支部との交歓会を御自身で主催する立場に反映されました。その実績を持って、今回は3度目の現地参加となりました。国内最大規模である関西支部の設立から一貫して同支部発展の牽引役であり続けた門馬幹事長の経験は、ツアー初参加とは言え、沼

田支部長と共にイスタンブール支部長カドゥザーデ温子さん (Pr平14) には大いに裨益するところがありましたことと存じます。

カドゥザーデ、沼田両支部長との語らいの中で、支部のメンバーが若年化していることが話題になりました。パリでは3年前の交歓会の際に得た情報と同じく現在も、企業のトップクラスに外語大卒が殆ど居ないとのこと。トルコ支部では11人のメンバーの内10人が平成卒、その6人が21世紀の卒業であり、在勤、在任年数は半数が2年未満とのことでした。3年振りの海外支部訪問でしたが、海外支部に東外大卒の重鎮が著しく減少しているとの印象が更に増したように思いました。他の各支部の状況は如何でしょうか。

本部との連絡、会報その他情報の供給には特に不満はないようですが、新規赴任者など新たに当地に移転して来た人の情報が得難く、在住同窓生の把握が容易ではないとのこと、その点は十年一日の感があるように思いました。その中で、母校の関連教授との連絡の強さが太いパイプになっていることも、長年の実績が示している通りであると存じます。その点でカドゥザーデ支部長と林副学長とのパイプは良く機能しているものでありましょう。時の流れと共に、海外支部の在り方も変遷するのは当然のことながら、東京外語大の特色の一つである海外支部ネットが、地道ながら着実に展開して行くことを期待しております。

断片的な感想ながら感じたままを御伝えすることで御礼と致します。



トルコ支部との交歓会